いま甦る七十年前の松江

若松　秀俊

松江を愛したフリッツ・カルシュの残した日本の思い出

旧大橋　昭和三年

あぁ傘さしてわれ行けば
ほのかに頬のつめたくて
（旧制松江高校六期生アルバムより）

天から与えられた全くの偶然の導きで出会ったカルシュ博士の足跡を、公務の合間をみて、諸処訪ねてみた。その間に松江の昔の様子を写した珍しい写真をみることができた。その多くは松江高校の卒業生の所持していたアルバムの中の写真であった。金沢に住む六期理乙の澤田が同期の増田の紹介でいきなり、自分のアルバムを小生の研究室あてに郵送してくれた。早速このすべてをコピーして返却した。この時期にはカルシュ博士の手がかりは少なく、調査の進展は難しい局面にあった。澤田は自分の高校生活と当時の先生の思い出を病をおして文書によって、語ってくれた。彼とは、二〇〇一年の十一月に、金沢の自宅で直接面会することができた。その折りに、嬉しそうに、当時の想い出を語ってくれた。それと前後して、田島、竹原らより、かつてカルシュ博士が描いた松江の景色のコピーを数枚を手に入れることができた。後で見た実物とはだいぶ異なる印象の絵であったが、この中にカルシュの心底を垣間見た思いであった。また、カルシュと直接の師弟関係にあった溝上、白石、宮田、江上、奥野らからも資料とともに、写真を戴いた。その後、十三期生の遠藤を京都の自宅に尋ね、彼のアルバムから、古い景色や松江の写真や、カルシュの家族と交換した手紙の写しを手に入れることができた。

その折りに、カルシュ在住当時の松江の様子を調べようとして、松江郷土館にも当時の松江に関連した風景や人物の写真が残っているかどうかを直接尋ねてみたことを記憶している。しかし、残念ながら、大正十四年から昭和十四年ごろの写真は戦争の混乱もあって、あまり持ち合わせていないことがわかった。その後、カルシュの次女でドイツ・マールブルク在住のフリーデルンとアメリカ・テネシー州チャタヌーガの長女メヒテルトの自宅を訪ねるに及んで、昭和の初期に撮った写真をつぶさに見せてもらうことができた。涙の出るほどの新たな感慨が湧いてきたことを記憶している。すべてを見た訳ではないが、一五〇〇枚程度の写真が整然と整理されていた。公開に関する厳重な約束をもとに、その一部のコピーを日本に持ち帰った。それらをもとに、カルシュやその家族、また生徒達との言動を併せて松江の昔の姿の再現の手掛かりとすることになった。《文中敬称略》

（一）松江との縁（えにし）

『大正時代の終わり、自由の雰囲気がまだ日本全体にみなぎっていた頃、一組のドイツ人夫妻が憧れの日本の地を踏んだ。フリッツとエンメラであった。フリッツは旧制松江高校のドイツ語教師としての誘いを受けていた。文部省の採用通知を胸に不安と希望の混じり合った気持ちで松江に入った。

赴任してしばらくした頃、大山の雄姿に接した。そのとき衝撃が彼の身体のなかを走った。幼い頃何度も夢見た懐かしの風景であった。やがて、この地は彼にとって、生涯切り離すことのできない不思議な縁で結ばれていることを悟った。戦争の足音が彼の運命を次第に変えていった。そしてついに愛する日本を離れた。しかし、それも彼の日本への想いと彼を慕う人々との絆を断ち切るものではなかった。そして彼のその想いとその絆は、彼とは何の縁もなかった一人の名もない科学者に天から優しく呼びかけることになった。』

「きずな」と「縁」を暗示する『湖畔の夕映え』のプロローグである。

1940年　フリッツとエンメラ

まず、フリッツがどんな人で何をした人かを概観してみたい。フリッツ・カルシュは大正末期から十四年間、旧制松江高等学校で教鞭を執り、多くの人材を育てた優れた教育者であった。彼の残した足跡と人々との交流には特筆すべきものがある。しかし、これまで全くといって良いほど、その業績が彼が住んだ松江の人々の間でも知られていない。

「袖すり合うも他生の縁」というが、縁もゆかりもなかったカルシュと筆者を結びつけたのは全くの偶然であった。縁らしきものがあるとすれば、筆者が三十年程前の若き日にドイツ学術交流会(DAAD)の奨学生として、ドイツの大学での研究生活の中でドイツの文化とそれを生んだ風土に触れる機会を与えられたことだけである。ここで語ろうとする話のそもそもの発端は、実はシュトゥットガルトのホテルで、カルシュ氏の娘さんに筆者が出会ったことにあった。しかし、今にして思うに、それに到る経過はとても偶然と思えない出来事の集積によるものであった。

残念ながら、彼は日本では戦中戦後の渦中に紛れた、人に知られぬ哲学者である。僅かな手掛かりから彼の足跡を追う中で、次第に彼の偉大さを知ることになった。何とかして、世に知られざる彼の功績を公平な眼で見てあげたい。そんな思いから筆をとったこともあった。ところで、戦前、旧制松江高等学校（現島根大学）のドイツ語講師として、十四年間にわたり、生徒に大きな影響を与えたドイツ人哲学者、フリッツ カルシュ博士が生まれて一一〇年経過した。彼は人の認識の発展過程を考究する人智学を提唱したシュタイナーを日本に紹介した人物でもある。日本を第二の故郷として愛した同氏を顕彰することは日独関係や日本の哲学史研究の上からも大きな意味がある。

彼は明治二十六年、ドイツ東部のブラゼヴィッツで父ヘルマン、母ルイーゼの間に生まれ、昭和四十六年にカッセルで没した。大正十四年にプラーゲ氏の後任として松江高校に赴任し、多くの人材を育てた。同時に日本の哲学や宗教の研究に力を注ぎ、また外交官として終戦まで働いた。松江を選んだのはラフカディオ・ハーンの書の影響による。

彼の薫陶を受けた生徒の中には「長崎の鐘」で知られる永井隆博士をはじめ、多くの著名人を見い出すことができる。直接に指導と影響を受けた者には、学界・政界・法曹界の重鎮、さらに実業界や外交官などの要職にあった者、スポーツ界の功労者が挙げられる。また当時指導を受けた台湾と朝鮮からの生徒は、戦後に故国で、殆ど例外無く、要職に着いている。その他、個人的接触や間接的接触によって、影響を受けた人も多数見られる。

（二）松江との縁（えにし）

カルシュが最初に日本と出会ったのは、一九一〇年のドレスデンの国際博覧会であった。関東大震災の前に日本の高等学校への誘いがあったが、募集が見送られた。その後に、長屋喜一の進言もあって、松江高校のドイツ語教師の道を選んだ。

一月半（ひとつき）に及ぶ航海の末に神戸港に着いたカルシュ夫妻は見知らぬ国で、不安と期待で一杯だった。それでも何とか一九二五年九月二十八日に憧れの松江に着いた。

証拠はないが、長屋の著書にこの時期に自ら帰国したことが記されているので、一緒に来日したのであろう。

松江の駅では高畠教授と多田教授が迎えてくれた。早速、人力車で二年前に造られた奥谷町の官舎に向かい、そのまま入居した。外国人講師のために建てられた小さな洋館である。その家に多田教授が新任の夫妻の居を定めてくれていた。

妻エンメラは夕日の中で異国で頼り合う愛を確かめるようにフリッツの傍に身をよせた。これが、日本での第一歩であり、真の意味での日本とのきずなが形作られる序曲であった。諸々の人々との不思議な縁が彼を待っていた。それから一ヶ月ぐらい経って、周りのことが少しずつわかってくる。落ち着いてくるとフリッツはすこしずつ動きだした。日曜日はちょっと散歩にでかける。

奥谷の官舎の近くは静かなところだ。ここに来ると不思議なくらい不安が消える。気持ちが落ち着くのだ。どうやら、心の静けさを感じさせる何かがあるようだ。

神々の住む出雲地方のことはハーンの書からよく知っていたつもりであった。

「自分の心が神々とともに、そして生徒達とともにありたいものだ」

そうフリッツが言っていた。カルシュ氏は来日以来、日本の社会や自然の中に限りない落ち着きを感じた。そして一見混然とした佇まいの中に見られる不思議な秩序に心のやすらぎを感じる毎日であった。そんな中で、日本に限りない愛着と親近感を見い出していった。彼は積極的に地元の人々と交流し、すこしでも日本の不思議にも思える、かつて経験したことのない、異質の雰囲気を吸収しようとし、自然の中にヨーロッパには見られない調和の美を見いだした。そんな中で、積極的に地元の人々と交流し、すこしでも日本の良さを吸収しようとした。

ラフカディオ・ハーンの住んでいた家を何度も一人で訪ねたという。ハーンの影響を受けて来日したフリッツにとっては、日本との最初の接点を与えてくれたという意味で感慨深いものがあったろう。この写真はメヒテルトと同僚の高畠教授とともに旧住居を訪ねた時のものである。メヒテルトも何度も父とここを訪れたという。今も変わらぬ雰囲気とたたずまいである。彼女の現在に連なる感性を培った日本の心と息づかいを今なお感じる処である。

ハーンの旧居を訪問したときのフリッツ・メヒテルト・高畠

後で、偶然に眼にしたのであるが、この写真が絵葉書の題材になっていたのが興味深い。

（一）松江の暮らし

通勤用に買い求めた自転車でカルシュは家の周囲を乗り廻しては、農作業のみんなに挨拶していた。

「ありゃ、今度の異人の先生だげな。こげなとこで何しているのかいな？」

「わしら、よくわからんが、何でもこの辺の写真をとっているとのことだで」

最近ドイツからひとづてに購入したカメラを持ち出しては松江周辺の田園の写真を撮っていた。

「いや、この間、太くて短い色つき鉛筆を使って、絵を描いていたようだったで」

「あれは、クレヨンと言うげな」

「いや、ちがう。チョークに似た棒状の絵の具でパステルというげな。粉末の顔料を固めたものだ。近所の高校生がいってたな」

「こんにちは」

ちょっとからかい半分に絵を覗き込んで、

「へーうまいもんだな。本物と同じだ」

草木が風にそよぐ。松江の周辺の田園の春はフリッツに若い血潮をたぎらしてくれる。自然のなかの命、一体となった自分の姿と心。フリッツは余暇にはそこで感じた美しさを一心に描写した。

宍道湖に出てみた。風に吹き寄せられる水の立てるかすかな波音、水の底の神秘が自分の心に呼びかける、その響きに耳をそばだてる。そこに深い静けさを感じる。嫁ヶ島のひとり湖上にたたずむ静かな美しさ、袖師ヶ浦の伝説を想い浮かべる。

そして、山陰の農村の風景に感動しながら、画用紙に向かって描写するときに、より深い心の平安と満足感を味わうのだった。

ここは古くから栄えた出雲の国。

宍道湖に臨む水の都松江は、東洋のヴェネチア、あのドレスデンにも雰囲気が通じる風光明媚な落着いた城下町である。

そして、現実に眼前でゆらぐ景色の抽象が自分の心のなかで心象風景として美しく夢と融合し調和する。

宍道湖　嫁ヶ島風景
フリッツ自筆のパステル画

袖師ヶ浦地蔵　現在は玉造道路関通りに移設
フリッツ自筆パステル画

（二）松江の暮らし

空はよく晴れていた。口笛を吹きながら松江へ用事で自転車を走らせている高校生が酒井である。途中の持田で自転車に乗ったカルシュ先生に行き会った。

「こんにちは。いい天気ですね」

互いに挨拶し、酒井がまず聞いた。

「先生どちらへいらっしゃるのですか？」

先生は、すぐ詳しい地図を拡げて、指でさした。

「ここらの案内なら、わたしにお任せください。ここの生まれですけん……」

彼は、自分の歩いたところはすべて辿れるようにしるしをつける。

持田村の夜景　フリッツ自筆のパステル画

「これから、ここに行くのです」

それを見て驚いた。土地のひとにとっても難所で、子供の頃は親から厳重に注意されていた加賀の詰坂である。

「そこは難所だから行けません、先生。まして自転車では……」と、

とめたが、先生は案外強情であった。

「地図には道が描かれているから、きっと行けるはず」

あまり強く言うので、説得をあきらめて、先生を見送り松江に向かって自転車を走らせた。

しかしどうも気になる。心配だった。

先生がいつか言っていたことを思い出した。

《ドイツの森は平坦でしかも疎林で、その間を自在に行ける。でも、日本の森は木が密生して道も急峻で、なかなか通り抜けができない。》

しかし、まあ、その森へ無謀にも自転車で行ったのだ。

《まず予定通りには帰れまい。下手すると、捜索隊でも出ることになりやせんか。》

と思ったら、居ても立ってもいられなくなった。

《とにかく後を追いかけ追いついて、一緒に行くなり、帰るなりせんとえらいことになる。》

松江の用事をそこそこに済ませて、大急ぎで引き返し、後を追った。本庄から手角、中山峠を越えて、日本海沿いの出雲浦部落を通って西へ行くのだ。この辺は集落を通過するごとに、上りと下りの坂道があるのだ。

「とても自転車では速くいけないのだが」

酒井は、ぶつぶつ言いながら、北浦、千酌、笠浦にでる。日本海の荒波に浸食されて、できあがった海岸線は、いたるところ岬、湾そして絶壁や岩礁で形造られている。漁港で賑わう野井、瀬崎と難路を急ぎ、走り抜けて野波の部落へはいったが、先に行った先生の姿はもうどこにもなかった。

ここから先はもうあの噂に聞く難所の詰坂である。どうにもしようがなく、通りがかりの土地の人に聞いてみた。

「異人さんを見なかったか？」

「見ましたよ。かれこれ三十分も前だったな。大柄の異人さんが自転車で山の方へ行かれるのをね。いま頃は、もう詰坂でしょう」

これを聞いて、

「こりゃ、だめだ。無理だ」

もう、これ以上追う気力を酒井はなくしてしまった。

翌日、先生が受け持ちのドイツ語会話の授業があった。きっと何か話があると思っていた酒井の目の前を通って、先生は教壇へ進み出てきた。

いつもと少しも変わらず、先生は、

「おはよう、みなさん」

と挨拶だ。狐か狸につままれたようでもあった。拍子抜けがした。

授業が終わると酒井がすぐ教壇に近よって、

「先生、詰坂はどうでした」

聞いたら、

「いやはや、けわしかった」

という返事だった。

「自転車は？」

といって聞いたら、手を肩まであげて、担いで行った恰好をした。

さすが、この先生、大戦中に従軍して、盛んに山野をかけまわった歴戦の人だ。道理で強い人だ。

（三）松江の暮らし

官舎の夕べのひとときを再現してみた。
「日本へきてよかった。みんな親切だ」
フリッツは手を休めてエンメラに向き直った。
「それに日本人はとても礼儀がただしく……」エンメラが編み物の手を休めてそう付け加えた。
この言葉はフリッツから何度も聞いている。彼の心は日本を深く愛し、日本の人々を慈しむことで一杯なのだ。彼は自分の持てる知識を惜しみなく生徒に伝えようとしている。それが彼女にはよく分かる。
「コーヒーでも入れるわ」
今年になって待望の子供に恵まれた。女の子のメヒテルトが生まれた。星の輝きを願って日本名を『星子』と命名した。
エンメラにとって静かな幸せであった。
でも、この子を連れて、ドイツに帰りたい。両親にもこの子を抱かせてあげたい。
何度もそう思った。日本に住んで、もう三年になる。メヒテルトが母親をみて無心に微笑んだ。

昨年は日本では大蔵大臣の国会での失言を契機に金融恐慌が起こり、社会不安が走る世の中になった。ドイツも同じ状況にあった。

「安らぎが欲しい」
先の見えぬ不安があるから、そう思うのか。
フリッツがつぶやいた。
エンメラが美しい声で静かに子守歌を歌う。
それがメヒテルトだけでなく、フリッツにも静けさと安らぎをもたらしてくれる。

奥谷町の官舎の階段

当時、エンメラは異国にあって、孤独を紛らわすためにも、樹木を植えたり、花壇を造り、毎日手入れをすることが日課であった。現在の建物は、島根大学所有であるが、老朽化が著しく、人が住めるような状況にない。
この地方にある数少ない洋館を文化財として、大切に保存する意味もあるが、この建物をカルシュの残した偉大な足跡の資料を保存する記念館として、再生させたいものである。
現在の小泉八雲記念館の近くに好奇心旺盛な小学生の松本昭少年が住んでいた。当時、自分とは別世界と感じたこの洋館はいまでも、忘れ得ぬ彼の心のふるさとである。現在、大阪在住の、その「昭少年」から家の内部の写真が送られてきた。時期同じくして、アメリカからは簡単な家の見取り図を手に入れた。
この時に、メヒテルトから直接に聞いたことがもとになって、『湖畔の夕映え』の一節にあるような「官舎での家族の夕べ」を想像した。

東京医科歯科大学　若松秀俊

（四）松江の暮らし

ドイツから学生が日本に尋ねてきた。大学生だ。ドイツ学術交流会から派遣されたと聞く。
「今、ドイツから交換学生が東京に来ていて、その中の一人が松江に来るから、話に来ないか」
毎日ドイツ語を学んでいる理科乙類の遠藤らへのお誘いがカルシュ先生からあった。
「いつか聞いたぞ」
「何を？」
「こういうときは、奥さんに花束をもって行くんだ。本でもよんだことがある」
やじ馬根性もあったが、習ったドイツ語を使うよい機会とばかり、いつもの連中が先生のお宅に集まった。

奥谷町官舎の庭

「はじめまして」
日本の習慣だ。手みやげに近所で買ったお菓子をカルシュ夫人に手わたす。
花束のことは、すっかり忘れていた。
「ハンスです。ミュンヘンからきました」
「よろしく」
一応、和気藹々（わきあい）である。
まずは、シチューのような、ソーセージとポテトスープ。それにポテトフリッター。これは先生が自ら料理したのだ。
次に、テーブルにはザウアー クラウト、それにポテトを添えたどこから手に入れたのかアイスバインが出てきた。冷えて脂肪が白く固まって氷のように見える肉料理だ。さらにサラダが運ばれた。すごいごちそうだ。
先生の音頭で
「ツーム　ヴォール！」
乾杯だ。ドイツから届いたモーゼルワインを飲み干した。
料理を口に運び舌鼓。ついにハンスの故郷のバイエルン料理の話になった。
「ヴァイス・ヴルスト（白ソーセージ）はすごいんだぞ。見たことあるか？」
と遠藤らにわざわざいった。
「うん、うん」
ちょっと気の毒に思いながら、傍らでフリッツが頷きながら聞いている。
「とてもおいしいんだ。でも、すぐに食べないとだめなんだゾ」
「作ってから二十四時間を越えると、本来の味は保たれないんだ」
と遠藤らに向かって得意気に滔々としゃべる。
そう言われても知らないし、何のことか分からない。こちらは高校生。歳から言えば、こちらの方が上の者もいるのに、とにかく、そのドイツの学生は威張って、シャクにさわる。
「くそっ！」
ついに、
「グライダーって知ってるか？」
ときた。
自慢顔に、彼は、グライダーで遊ぶ話を始めた。
「発進の時はどうするか知ってるか？」
「オートバイの後輪に、ドラムを着けて、それに綱を引っ張らせるんだ」
と言う。
「おまえら、人力で引っ張ると思っていたろう」
こんな田舎の松江では、グライダーを見たことはない。が、《月刊の航空雑誌には、グライダーで遊んでいる記事や写真が載っている。》そう思った遠藤。
「日本では、自動車の一方の後輪にドラムを着けて、地面から浮かせて、それで発進させている。その方が安定感もあり、工作もし易いはずだ」
不十分なドイツ語で、それを言うのだが、先方にはそれが理解できない。
「ところで、やつめは自動車の車軸に差動装置のあることですら知らないらしいぞ」
「俺は、中学一年の時に、模型を見たことがある。そんなことは雑誌にも出ていた」
と傍の友達も言った。
この論争？を見かねて、というか、聞きかねてというか、カルシュ先生が中に入って
「遠藤らの言うこと、もっともだ」
と言って、ドイツの学生に説明した。
「ヘェー　先生は科学にも詳しいんだ」
「でも、専門の倫理や哲学の知識はなかなか触れる機会はないな」
休み時間に誰かが、
「カルシュ先生と呼ぶよりも、ヘル ドクター、と呼んだ方が喜ばれるゾ」
と言っていた。
でも、誰かがそう言っているのを聞いたことはないし、言ったこともない。

東京医科歯科大学　若松秀俊

（一）松江のむかし（旧松江高校）

東京医科歯科大学　若松秀俊

（一）松江のむかし（旧松江高校）

生徒から見たカルシュとの親交とその影響の具体的根拠はなんといっても、現在元気な人の「生の言葉」である。また、『嵩のふもとに』（旧制松江高等学校校史）の【恩師列伝】と【忘れ難き人々】のなかに「田舎の大学 酒井勝郎」、「カルシュ先生 酒井勝郎」、「カルシュ先生、ギルソン先生 田総武光」、「六十二年前のカルシュ先生 木村登」を根拠とするものである。そこには、ドイツ語を全く知らない生徒に僅かな手がかりをもとに教える才能、ショーペンハウエル、マルクスなどの解説、そして日本の当時の代表的哲学者の一人の高橋敬視教授にハルトマンを紹介し、その翻訳を彼自身が協力したとの記述などが見られる。

「高橋敬視先生 勝部真長」にもそうしたことが書かれている。

カルシュの帰国後については、「カルシュ先生と田島君 奥野良臣」に、直接の師弟関係にない生徒との交流が書かれ、「松高を思い出す座談会 岡崎、白石、高田、増田、松田、宮田、森山」では、生徒へのカルシュの絶大な影響がにじみ出ている。その他、彼の薫陶を受けて成長した「ワクチン生産の功績者奥野臣君 青山博」の記事は、如何に彼の授業が旧生徒を当時のドイツ先進科学、ヨーロッパ合理主義へ眼を向けさせたかを雄弁に物語るものである。その他、カルシュの旧生徒の手記については枚挙に暇がない。例えば大阪支部会報『淞友』で「カルシュ先生を迎えて」、「老博士はるばるドイツから」、「カルシュ先生を悼み」、「カルシュ先生の授業」などがあり、カルシュのことが繰り返し、語られていることは否定しがたい意味があると思っている。同じように教師の身である筆者からみても、重要な意味を提供し、教育に対する問いかけをも与えてくれる。「Brief zu Frau Karsch」はドイツ語で書かれたエンメラ夫人あての旧生徒によるカルシュ氏逝去時の慰めの手紙である。また、東京松高会報には「カルシュ先生の訪日について」およびカルシュ氏の招待を計画しながら不慮の事故で自ら完遂できなかった田村氏のための「追悼田村清二郎君 暉峻凌三」やこれらを載せた新聞記事がある。私信を含めてたくさんの書簡と関連写真もあり、如何に旧生徒から個人的に慕われていたかを知ることができる。

カルシュと生徒とのエピソードには、野外での授業での生徒とのやりとり、一時帰国時の歓送会、雨の日の生徒との心の交流、下宿での生徒とのやりとり、哲学書の話など残っている。これらは、小説『湖畔の夕映え』にも載せてある。カルシュの人柄を知る上で、とても重要なエピソードである。

そのうちの、幾つかを紹介しよう。

（二）松江のむかし（旧松江高校）

そもそも、「カルシュのエピソード「軽石」が初めて新聞の文化面に採り上げられてから、湖畔の夕映え」に詳細を述べるに至るまで、カルシュを話題にするときはいつでもこの話が出てくる。人の問いかけに、決してはぐらかさず、真面目に対応するカルシュの誠実さを如述に示すものである。

カルシュが着任した頃の話である。生徒の希望があって、野外にみんなで散歩に出たことに始まる。

放課後になって、先生と五、六人のグループで自転車でサイクリングだ。行った先で、何かを拾って来ては、質問して先生に会話のチャンスを求める。それに対して、カルシュはいちいち、面倒がらずに笑顔で生徒の質問に答える。

出雲浦の千酌（ちくみ）まできた。浜で拾った珍しい小石を見て、チャンスとばかり、ちょっと、カルシュ先生に聞いてみようかと思った生徒がいた。今日教わったドイツ語の練習だ。何の石か聞くと

「ビムスシュタイン」という返事だ。しかし、こんな単語は誰にもわからない。

そこで、「ビムスシュタイン?」という的はずれな質問をおそるおそる、誰やらが出した。先生が「ビムスシュタイン は英語で パミス ストーン」と言う。「パミス ストーン」の単語がわからずんな目を白黒させている。。

けれども、「パミス ストーン?とは何?とはとても聞くわけにはいかない。わからなくて英語の単語で説明して貰って、まだわからないからだ。拾ってきた生徒はもちろん、みんなもこの石が『何の石』なのか初めから知らないのだ。だから、聞いたのだ。「小学生の質問じゃあるまいし……これ以上は続けられない。でも、会話をつづけたい。何とかしたい。その成り行きを生徒達が不安げに見ている。

すると、先生は紙と鉛筆をだして、筆談で説明しようとした。

まず、エルデ（地球）の内部から、溶けた熱い岩が表に噴き出ると話した。ヴルカノ（火山）のことだ。これは中学校で教わっていてみんな知っていた。

「その時ふき出した溶けた岩に水が触れて、『じゅっ』と……急に冷えて。固まると説明した。これでみんな、納得しわかった。軽石だということが分かった。

その石、水に浮くかどうか勢い込んで英語で聞いた者がいた。これが、後に《長崎の鐘》で知られる、あの永井隆博士の若き日の姿である。先生も、そのとおり。みんな分かりましたね！と先生は嬉しそうに顔をほころばせた。とにかくこの英語、ドイツ語それに日本語をごちゃまぜの会話で、一件落着ときた。

今までとは、えらい違いで、面倒がらず、はぐらかさずに、答えてくれるのを見て

カルシュ先生の前後を生徒が取り囲み歩くようになり、。先生がつまずく。みんなが支えるという風に自然に近づいていった。

その帰り道にみんなで食べる駄菓子を先生が買った。ここで、カルシュ先生の口から『いくらするか』とうっかりドイツ語で

で聞いた。続いて、値段が何ペニッヒなのかとドイツ通貨の名が出た。すると機転の利いた生徒が「フュンフ 銭！」とドイツ語で値段を言う。先生が五銭玉を盆に置いて、にこやかに店のお婆さんに会釈する。そんな形の集団散歩であった。こんなことが繰り返され、先生と生徒との距離が一層近くなった。

如何にに慕われていたかをこのエピソードから知ることができる。

カルシュ父娘と生徒たち（校庭にて）

(三) 松江のむかし(旧松江高校)

《カルシュ先生と一緒》と題して生徒との交流を語ろう。次の写真は昭和六年に、カルシュが一時的にドイツ帰国する時に催された校内の集会の様子で、『湖畔の夕映え』の一節をなす物語である。この調査で大きな役割を演じた白石**磷**氏をユーモラスに描いている部分でもある。

昭和六年春一時帰国時にあたってのカルシュ先生送別会。山下先生とともに撮影。後列左から２番目が岡崎、３番目が宮田、前列左から２番目が白石である（白石氏が提供）

九期文乙生が催した送別会が済んで、会場である座敷の外の縁側で撮影したこの写真は小説の裏表紙に載せたものである。前列左より二番目白石、三番目はクラス担任の心理学が専門で後に東京音楽学校に転任した山下、四番目はカルシュ、後列左より二番目岡崎、三番目宮田、後列右より三人目に鹿野らの顔が見える。

この時の想い出を白石が次のように語っている。これは、学校の集会所で学級主任も同席して送別会を催したときの話である。昭和六年第二学年の年度末の早春、カルシュの四月から七月にかけてのドイツ一時帰国の際にクラス一同の相談の結果、先生の送別会の開催を決めた。準備はクラスと学校事務局・各教授との連絡役である高等小使の役にあった朝日重雄と白石磷の二人で担当した。会はとても和やかで日独語が入り交じった賑やかなものであった。昼食だったか、早い夕食だったか、食べものが何であったかはすべて忘れた。しかし、カルシュと膝をつき合わせての会食は初めてのことであった。カルシュも本当に喜んでいた。このときも微笑をたたえ、日本語なしでの会話をつづけた。最後に白石がドイツ語で閉会の挨拶をして拍手を受けて会は終わった。その時カルシュが白石に微笑みながら握手を求め、短いドイツ語で何か言ってくれた。しかしこの言葉が白石には聞きとることができず、またこれを先生に聞き返すとっさのドイツ語の作文ができず、今日にいたるまでその意味がわからずにいることが残念で仕方がない。閉会の辞が自分に決まった時に日本文で、原稿はすぐ書いたが、ドイツ語に直すときに「俺が助けたる」と言った者が一人あらわれた。これが鹿野明である。教室の椅子席はアイウエオ順のため鹿野、白石と「シ」で三年間つづいて並んでいた。それで早くから仲良しの一組であった。この鹿野が原稿を読みながら、一心にドイツ語の辞書をひき、一年生の時苦しんだ文法の教科書を引き出して、意見を聞きながら書き上げてくれた苦心の作であった。彼は昭和六十三年に他界しているが、この送別会は自分達にとっては大事な学友が残してくれた大切な思い出であった。

今と違って、料理などお粗末なものであった。先生を囲んでの心楽しい集いであったことが小説からも推察できる。聞くところ、カルシュの旅行日程が三月二十日の神戸港出帆であった。船はハンブルグ・アメリカラインのドイツ国籍のヘルクーゼン号で、五月初めジェノヴァ着であった。陸路ミラノ経由、アルプス越えでドイツ入国であった。三月二十日はすでに学年末休暇に入り、学校は入試の最中であった。大阪の自宅に帰省していた宮田は先生の出帆に間に合うように神戸港停泊中の貨物船宛に、心もとないドイツ語で、旅行中の安全と無事と再来日を願って書状を発送したとのことである。はたしてカルシュの手許に届いたかどうかは分らぬままであったとのことである。それはともかく、ジェノヴァまで一ヶ月半近くもかけての船旅で御苦労なことであった。ドイツからは一度絵葉書便りがクラス宛に届いた。永らく教室の掲示板に押ピンで止めてあったが、いつの間にかなくなった。

東京医科歯科大学　若松秀俊

（四）松江のむかし（旧松江高校）

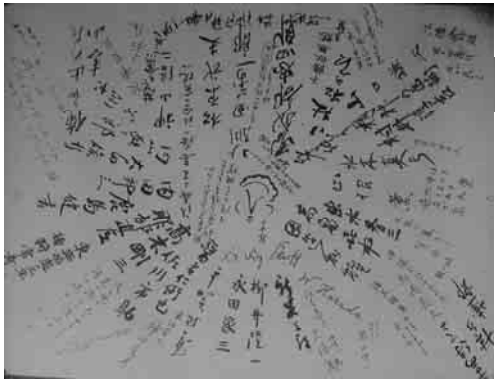
《学園祭の模擬店》「有り難うさん」という模擬店の名前が小説で語られている。奥野良臣大阪大学名誉教授が手記を寄せてくれた。彼によれば、カルシュの口癖は何かして貰うと「ありがとうさん」であったという。松江高校にも他校で見られる学園祭が年に一度あった。記念祭と読んでいた。勉強よりもこちらに全力を傾倒する生徒も少なくないくらいこの行事には張り切るものであった。

模擬店の前での記念写真
（卒業アルバムより）

ある年の学園祭の折り、十四期理乙クラス三十名の出し物の一つとして模擬店が一軒急造された。飲食店を提供したりして「まち」のメッチェンなど人々を歓待するのであるが、生徒は学園祭の模擬店で店の名前を「有難うさん」とした。カルシュの口癖を真似て麗々しく大きな店名として張り出した訳である。カルシュの人気が高かった一つのエピソードである。微生物学に大きな業績を残し日本のジェンナーと呼ばれる十四期理乙の奥野は古い昔の事ではあるが、鮮明に覚えているとのことだ。実際、学術情報がとくにドイツ関係の論文などが重要な先端的役割を果たしていた時代に、カルシュから教えられたドイツ語が彼のマラリアに関する世界的研究成果に大きな影響を与えてくれたことを自ら筆者に感慨深げに語ってくれたことが印象深かった。それに「ドイツ語を教わったことは勿論のことであるが、その他重要な人生哲学の一端を教えられ、私の後の仕事に重大な影響を与えた自分の大恩人でもある」と語っていた。

筆者との別れ際に「今天国に居られる先生に、私共の模擬店名『有難うさん』の写真に大きな慰斗を付けて差し上げたい」そう、語ってくれた。当時の資料や学園祭の写真を筆者に手渡してくれた。それを見て、今もあまり変わっていないことを感じたものであった。ところで、この頃は今で云う未成年の飲酒はどうであったか聞くのを忘れたが、キリンビールのテントの模擬店はなかなかモダンであったようだ。すし、ライスカレー、煮物、うどん、しるこ、紅茶、ミルク、ケーキ、コーヒなど一〇～二〇銭（?）で売っていたようで、現在の大学祭の模擬店とそっくりだ。

このころは先生に対する思いだけでなく、生徒同士の絆もとても大事にしていた。寄せ書きが残っている。今に至るまでの親密な交際の基礎となっている。



十四期生寄書き　教職員の名前も見える

とにかく、学校教育全体が、生徒を自然な形で専門の途に誘導していったし、それが画一的な誘導でなく個性にあったものであったという。思い切ったエネルギーの燃焼の仕方をまた、ひとの優しさと思いやりを授けてくれたカルシュを今も折にふれて思い出すという。同様のことを酒井も自ら教鞭を執った島根大学で自分の学生に語っていたという。

東京医科歯科大学　若松秀俊

（五）松江のむかし（旧松江高校）

《マルクスの逸話》　社会主義の風潮が高校生にも及んでいた昭和六年、生徒達が理不尽に思えた生徒の処分に、精一杯抗議した授業放棄は、その当事者でもあった、細田吉蔵元運輸大臣が生の声で語り、記録も残してくれている。いつの世でも若者の純真な心と行動は感動を与える。それにこの時のカルシュと生徒達の心の交流は何とも美しく印象深いものがある。同盟休校が十一月に済んで、その年の暮れか昭和七年の早春の卒業前に二階の教室において、カルシュが当時日本では高校生、大学生たちが大きな関心をもっていたカールマルクスの逸話について、生徒の質問に答えている処である。彼の信条から言えば、当然マルクスに反対の立場であった。

この授業は九期文乙クラス一同の心に今でも深く残っているものであると当時の高等小使の白石が語ってくれた。この経緯については宮田が「見つかった講義録」のなかで詳しく述べているが、当時、他の先生の授業の仕方も同様であったろうが、単なる紋切り型ではなく、カルシュの授業が臨機応変に生徒の関心に沿って行われたことを象徴的に表している。

白石が提供してくれた先生の授業風景の写真はその一齣で、先生のうしろ黒板の右が問題文で、ノートにも記録がある場面である。日付は不明であるが、昭和七年一月末か二月初頭であろう。宮田の記憶によれば、問題文の方は学友の中村雄光（義明）筆蹟ということである。

大学入試のための和独訳演習

授業が始まってからずっと味もソッ気もないただの翻訳の作業が続く中で、つい時のはずみで先生もあらぬ方向へ話が逸れたのだろうと思う。九期文乙の岡崎・宮田・白石が相槌を打ちながら筆者に語ってくれた。その三人もすでにこの世を去っている。

カルシュ先生 の講義風景九期文乙（1932年）

（六）松江のむかし（旧松江高校）

フリッツは、漢字や仮名を毛筆で美しく書いていたという。少しでも日本の心を知るために和服も好んで着たという。妻のエンメラも和服を何時までも大事にしていたという。その父と生徒の間の心の交流を目撃したメヒテルトの思い出に基づいて『湖畔の夕映え』で描いたが、後になって十期文乙生の矢崎も目撃したことを聞いた。そんなカルシュの実話である。

和服姿のフリッツ・カルシュ

《雨の夜のできごと》

雨の日の夕方、何やら外で大声がする。松江高等学校の生徒が官舎の窓に向かって叫んでいる。

「先生！カルシュ先生！」

「俺は、カルシュ先生が好きだ」

この雨の中アスファルトの上におすわりして、ずぶぬれだ。

「ファティ、なーに？」

メヒテルトが何のことか訳がわからず、お父さんに尋ねた。

「うん、学校の生徒だよ」

「どうして？」

どうやら、生徒は泥酔に近い。

「そんなことしていると風邪引くぞ。家に戻ろうや」

とフリッツお気に入りの蛇の目傘をさしかけてやさしく説得した。

「何かつらいことがあったのかい？」

すると生徒が

「俺は大好きな先生のために歌を歌うんだ」

何か友達とあったらしい。

「わかった。わかった。ありがとう」

「でも、もう帰ろうや」

「ドイツ万歳！」

突如ドイツ国歌の《皇帝》を歌い出した。

「ありがとう。吉田君」

生徒の肩を抱いて家に招き入れた。

エンメラの入れたコーヒーを飲んで体が温まったようだ。

「さあ、帰ろうな。

君が見えなくなって皆も心配しているよ」

そう、説得して彼の下宿につれ帰った。

そんな、カルシュ先生だった。

この矢崎は後に、広島高等裁判所長官を務めたが、彼が語ってくれたもう一つのエピソードがある。

《広島にて》

再来日したときのこと。広島で 平和公園を少し歩いて平和記念資料館に入ろうとしたところで、人の影の石を見た。

「原爆炸裂時の人影が壁に残っているのです」

と、かつての生徒である矢崎がそう説明した。

そして、悲痛な声で

「ほら二人で先生を訪ねたあのときの、若槻が原爆でなくなりました」

ぽつりと語った。

フリッツが大使館に勤務していたころ、ドイツに三年留学して帰った大蔵本省勤務の若槻が矢崎と訪ねてきた。ドイツの体験をいかにも嬉しそうに語ってくれた。それを思い出した。

何ということであろうか。そうだったのか。

フリッツは顔を曇らせた。

(七)松江のむかし(旧松江高校)

《ニーチエの解説書》の逸話を語ろう。この話は十三期乙の千代賢治の思い出に基づくものである。

高校生は少年から青年になって、誰からも一人前として扱われる。入学式でも校長が、祝辞の中でそう言ったという。とにかく高校生になった千代賢治は嬉しくてしょうがない。おれも、おとなだと思えば、饅頭屋に入って饅頭をたべるのも、映画館に入って映画を見るのも、停学覚悟だった今までと違う。当時の中学生にとって、高校の生活はめくるめく変化であった。

それにも増しての変化は経験したことのない外国人のカルシュ先生から講義を受けることだった。

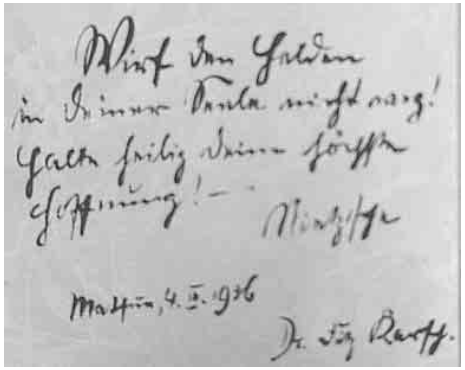
窓を指しながら繰り返す「ダス イスト アイン フェンスター」の言葉はカルシュ先生の第一声で、決まり文句であると先輩が言っていた。後で聞いて、何だと思った。驚きと安堵が一緒にきた。

先生は授業中は一切日本語を使わない。我々にはすべてドイツ語で話す建前を自分で守っていた。

三年生になって、ある日の終業後に、クラス仲間が高下駄の歯を鳴らしながら下宿へと向かっていた。ふっと後ろに人の気配がした。気づくと日本語で声をかけられた。先生が通勤用の自転車を押しながら追いついて来た。ニコニコしながら我々の列に入った。直ぐ近くにいたのが千代だ。しかし、傍らの級友が黙っていると間が持てないので、何か言えよとしきりに促す。しかし、何にを言っていいか分からず、往生している。何か話さないと間が悪いと思い、

「ニーチエの《ツァラトウストラかく語りき》のいい解説書はありませんか?」

と思いつきを千代は言った。学校の授業で習ったばかり、のホヤホヤだ。ニーチエ　一九世紀後半の偉大なる哲学者だ。キリスト教を鋭く攻撃し、超人と永劫回帰の思想による独自の形而上学を樹立したと習った。



カルシュ博士自筆・毛筆によるニーチエの言葉

松江在住の前田氏所蔵

それを聞いて、先生は一瞬、驚いた感じだ。しかし我が意を得たりという調子で、原書を紹介してくれた。別れ道まで先生はドイツ語混じりの日本語で情熱的に話をしてくれた。先生の話は全部は分からなかったが、一生懸命なので友人の心配顔がそこにあった。しかし、こりゃ、エライ事になったと後になって言っていた。

ところで、おまえ、カルシュ先生の哲学の立場を聞いたことがあるか?と真顔で聞かれて、

「うん。ちょっとだけ」と上の空で答えた。

しかし、ニーチェとは難しく出たもんだなとの冷やかしであった。

千代は《ただ靴の踵の音高く大股で正しい姿勢で歩くその印象がカルシュ先生の全存在を示唆している》ようにも思った。

実は、両親が高校生相手に下宿屋を営んでいた当時の小学生で、現在は春日郵便局長前田俊明の家に、カルシュ自筆の毛筆のニーチエの言葉が色紙に残っていた。

汝の心に「英雄」の気概を失うことなかれ。汝の最高の希望を保持せよ。これがその翻訳である。

（八）松江のむかし（旧松江高校）

《先生と生徒の情熱》について、生徒の手記をもとに、当時の様子を再現してみた。

夕方、久しぶりに早めに帰宅し、食後にぼんやり昔のことを想い出していた。

高校生の頃、よくわけの分からないことに対して、本格的な学問とは思えないような、単純なことを繰り返し行なったエネルギーは一体何だっただろうと社会人になってから、よく考えたものだ。

毎日忙しくて、普段は決して思い出したことがなかったことが脳裏をかすめた。

平成に世が変わった頃、久しぶりに岡崎、森山、白石らと会ったことだ。

そのときに、ドイツ語担当の胡麻塩頭の小林教授をみんなで話題にした。

もしかしたら、その辺にそのヒントがあるのかも知れない。

「その訳ではだめだ」

順番に進められる我々のドイツ語の解釈が主な授業内容だ。

しかし、時には先生も適当な日本語が見つからない。

「うーん」

身が教壇にあることを忘れ、長考することがよくある。

「あとで念のため、カルシュさんに聞こう。カルシュさんがいて、我々は本当に助かる」

というわけだ。

「とにかく、小林先生はユニークな教授だったな」

「ドイツ語の音読は快適だったが、訳すときの日本語がうるさかった」

「《一的とか一性》は一切使わない」

「そういえば、《彼、彼女》もだめで、頑固に《その人》と言い続けたな」

「いわば、信念のひとだったな」

「《山をよじ下る》、《荷物を積み下ろす》などが考えた末に出てくる訳語であったな」

何せ迫力があった。

「そんな、訳語はな、君、愚にもつかない《悪訳》だ」

と嫌なものには吐き棄てるように、そう生徒にぶつけた。

「それにしても、副保証人でよく面倒見て貰ったな」

と森山が言った。

生徒の生活や学習の指導をしてくれる親父のような存在が副保証人だ。

昭和3年　松江高等学校卒業時の職員一同（第六期生卒業アルバム澤田氏提供）
左最前列左二番目がカルシュ博士である。

いつものまとめ役の白石が補った。

「そういえば、森山、高田、岡崎らと先生のお宅に押しかけたな」

すると、愛想良く《よくきたな。さあやりましょう、酒を飲んだ人間に悪人はいないよ。》と小林が酒をすすめてくれた。これが普通だったから、驚きだった。

「しかし、あの姿はまさに、大人（たいじん）であったな」

とアリストテレス哲学の好きな岡崎が最後に言った。

東京医科歯科大学　若松秀俊

（一）カルシュと大山

フリッツは日本の生活に少し慣れた頃、近辺を汽車で高畠と旅行した。間近に大山を眼にした時の衝撃的な印象は、彼のその後の生活に重要な意味をもっている。その場面はメヒテルトの証言をもとに描いたものである。このことはカルシュの日本との深い関わり描く、『湖畔の夕映え』の全体を貫く重要な主題でもある。

……　……　……

米子を経て溝口から桝水（ますみず）高原に向かおうとしたいい天気の日だった。見上げると青空が澄んで、筋雲がたなびいていた。

高畠と一緒のフリッツは途中、歩きながら何の気なしにふと東の空を振り返った。このときにくっきりと浮かぶ大山の西の側面の美しい姿が目に入った。この景色にフリッツの眼は釘づけになった。同時に彼の身体中に電撃のようなものが走った。しばらく、身動きができなかった。この光景は西から見た雄姿であり、伯耆富士（ほうきふじ）と言われるように美しい。そのとき眼に映った均整のとれた姿は、まさに彼が五、六歳頃夢にみたあの姿そのものであった。

「遠い昔見たことのある景色だ。これこそ、私のふるさとだ」と彼は思わず叫んだ。

中海の向こうに見える雄峰大山

フリッツ自筆のパステル画

この話をメヒテルトは幼い頃何度も聞かされたという。筆者は、小説『湖畔の夕映え』をこの話をもとに構成した、一見あり得ない、不可思議な体験といえよう。

実は、彼の生まれ故郷にはこのような風景は全く存在しない。地形からも明らかである。しかし、清水が絶えず湧き出るこの桝水高原から見える優美な姿こそ、彼の記憶にある、何度も夢に見た自分のふるさとであったのであろう。彼は、運命や仏教でいう輪廻や前世をよく話題にしたという。

足下に目を移すと素晴らしい景色が拡がっている。

北からみた大山の姿は険しい地肌を見せるいわば男性的な姿である。

東に廻ると茅の穂なみが広がるさわやかな高原である。

彼は後に好んで、大山をパステル画に描いている。その絵が筆者の手許にある。

しばらくして、我に返ったフリッツは大山を仰ぎながら、高畠と連れだってその中腹に向かったのであろう。

以下は、もちろん想像であるが、こんな会話が聞こえてくるようである。

「わたしは、遠い昔、ここに住んでいたことがあるのです」

「いや、住んでいたような記憶があるのです」

「何を考えているのですか。カルシュ先生」

「いや、ちょっと……。むかしのことです。それも、自分の生まれる前のことです」

「なにやら、宗教的ですな」

と高畠がいぶかしげに言った。

そんな情景が、百年の歳月を経て、今カルシュの周りによみがえる。

山下夫妻と共に大山にて

写真中の日本語はカルシュ自筆

（二）カルシュと大山

フリッツ・カルシュ博士は当時の松江高校英語教授のギルソンおよび後の鳥取大学教授で、一貫して英語教育に尽力した田総武光（たぶさたけみつ）（八期文甲）と大山で過ごしている。以下では彼の残した手記を借用しよう。

ギルソン英語教授と田総武光（八期文甲）と大山にて撮影

田総が淞高に入学した当時の外国人講師は、ドイツ語のカルシュと英語のミアーズの二人であった。彼が二年生に進級して間もなく、町で外国人に出会った。おそるおそる、彼に話しかけると、新任の英語講師のギルソンであることが分かった。当時奥谷町には、外人講師のために、欧風の白亜の官舎が、まるで双子のように、行儀良く二軒並んで建てられていた。官舎である。ギルソンはその一軒に入居したばかりであった。この頃、田総は近くの井原家に下宿していたので、片言の英語で会話をするのが楽しみで、よく先生の所に話しに行ったとのことである。ギルソンも日本語が分からないので田総と行動を共にするのを喜んでいたし、頼りにしていたという。そのうち、一人暮らしの不便さから、田総の下宿している井原家の離れに引越して来たので、ギルソンは六畳の間に、田総は三畳の間に住むことになった。こうして二人は親子のように行動を共にすることになったとのことである。ところで、『湖畔の夕映え』では、生徒の名がたくさん出てくるのと、直接授業で田総がカルシュと接触がなかったことから、遠藤（十三期理乙）の物語と合体した描写がしたが、実は以下の実話を元にしたものである。

夏休みになると、一緒に隠岐観光や大山登山など方々一緒に歩きまわった。隠岐では、西郷の近くで、珪藻土の山肌に無数の穴居があって、その一つに、壁画のあるのをみた。どういう訳か今でもその壁画がはっきりと記憶に残っているという。『湖畔の夕映え』では遠藤の体験と類似しているので一緒に書いてあるが、この部分の体験は田総の手記によるところが大きい。残念ながらギルソンは僅か一年で松江を去り、アメリカに渡り、その後は消息が絶えたという。

一方、カルシュは、夏休の間ずっと大山に家を借りて過ごすのが常であった。田総がギルソンと一緒に大山登山をした時に、カルシュの在所に立ち寄ったことがあった。彼は浴衣を着て下駄ばきで庭で迎えてくれた。椅子にかけて長々と話が続いた。カルシュは、納得するところ、必ずイエス、イエスと二回繰返して相槌をされるのが癖であったという。今でも、そのイエス、イエスが筆者の耳に聞こえて来るようである。その時の写真を見る度に、三人で話したことがなつかしく偲ばれるという。数少ないカルシュの和服姿を映した写真から、大山での当時の夏休みの雰囲気が伝わってくるようだ。

大山の山頂附近の家

（二）松江のむかし（街並）

宍道湖岸の湿地帯の一寒村が、山陰・出雲の中心地となったのは、約四百年前の慶長年間堀尾吉晴がこの地に築城してからである。吉晴はこの地を、中国の淞江に似た環境から松江と名付けたと伝えられ、出雲・隠岐2カ国の城府と定めた。それゆえ、何と言っても、松江のシンボルは松江市のほぼ中央に位置し、松江市街を南北に連絡する大橋川にかかる松江大橋である。欄干は擬宝珠がつけられて和風である。この橋は「白潟橋」「カラカラ橋」といわれていた。これと併せて、明治初年に破壊されずに残った天守閣千鳥城と石垣がシンボルであろうか。ここに学園祭の時など生徒達が繰り出した。

松江城をバックに高校生達

カルシュは生徒達と連れだって、またメヒテルトとともに何度か城に登った。それとともに、人々の生活や街の様子の写真を撮影した。

松江の通りの一場面

バケツを両手に下げて舗装されていない道路を歩く婦人が見られる。

石橋町付近の様子

松江の街並み

左写真の右手に見えるのは駄菓子やのようである自転車の旗は、小説にでてくるアイスクリンの旗であろうか。次は当時の女子学生と乗り合いバスが映っている。女学校の前がバスの停留所であったのだろうか。どんな職業の人であろうか。男性の姿が印象的である。

松操女学校の近くであろうか

東京医科歯科大学　若松秀俊

（二）松江のむかし（街並）

フェーン現象に見舞われた一九三一年五月十六日のこと、松江が大火に襲われた。末次本町から火が出て向島町まで延焼し六二八戸焼失した。末次大火と呼ばれる。被災後に、町名を東本町に改名した。その時にフリッツが撮影した貴重な写真である。場所は東本町付近であろう。

ついでに言うなら、火災については一九二七年に白潟（灘町）で大火があった、一九三七年四月十四日には土手町から外中原町まで武家屋敷、町家二五二戸全焼した。

1931年5月大火　東本町付近

左は、当時としては珍しい航空写真で場所も特定できる。松江―城崎間一六〇キロに定期航空路が昭和八年七月、開設された。水上飛行機を使い、話題となったが、十二年に廃止された。

松江航空写真

堀川に沿った街並であろうか。当時の民家の特質が見えるようである。

東京医科歯科大学　若松秀俊

（一）松江のむかし（松江城から）

カルシュ一家が暮らした一九三九年以前の松江および周辺の写真のうち、千鳥城からの撮影によれば、人家も少なくすっきりしていた。上写真の建物は母衣小学校である。

松江の東、中海の近くに聳える標高三三〇メートルの嵩山（だけざん）がある。嵩山は高い山を意味する山だ。今は、当時の松江高校のキャンパスに高層建築が立ち並んで視界を遮っているが、昔は周囲一面が田圃で民家が少しある程度であった。

したがって、学生寮である自習寮の丘からの見晴らしはよく、和久羅山（わくらやま）と樂山（らくざん）とともに、乙女が仰向けに寝た姿に見立てて、昔から寝佛（ねぼとけ）と呼ばれていた。松江高校生はロマンを託してメッチェン山と呼んでいた。その麓でみんな思い思いの学園生活をしていた。

因みに同じ漢字を当てる嵩山（すうざん）と呼ばれる中国河南省洛陽の東にある中国五嶽の一つの名山がある。同名で鎌倉末期～南北朝時代の臨済宗の僧がいる。二度中国（元）に渡り、南禅寺、円覚寺に住した。

五山文学の代表的人物で著書に『嵩山集』二巻がある。

このように崇高なシンボルでもあった。

生徒たちにとっては運動に勉強に励んだところ、青春のすべてを包んでくれた高校生活の象徴であった。

フリッツにとっても彼の日本での生徒との交わりの象徴であった。この地を愛した彼は周辺の景色や建物を描くために、画紙集とパステルをもってよく散歩に出かけた。

宍道湖と中海を結ぶ大橋川の袂や近くの神社では何時間もそこで我を忘れて描画に没頭したものだった。

メッチェン山と呼んだ嵩山（だけざん）は松江の人々の心に生きる

左上写真の建物は元松操女学校で現在の自治研修所という。

東京医科歯科大学　若松秀俊

（二）松江のむかし（松江城から）

松江城の櫓より見たお堀端の様子、むこうに見えるのは元勧業銀行で、その後は山陰放送局になった。現在はセンチュリービルが立っている。

左は松江城から南東の城下の眺めである。ハーンが中学生と松江城から夕日を眺めたことへの想いを胸に、何度も登城したとのことである。

これは松江城から見下ろした現在郷土館がある、松江城二の丸跡に近い広場であろう。

城の石垣が残っている。松江城の裏手にあたる北側と西側は内堀に面して石垣がなく、切岸になっている。軍事・経済的事情があったのであろう。

（一）松江のむかし（湖畔）

写真を繋いで作ったパノラマが残っている。宍道湖は地核変動による陥没湖であり、水質からいって汽水湖である。東西に長い矩形で、湖岸は単調である。生物の種類が中海とは異なり、シジミがたくさんとれる。カルシュも幾度となくハーンの称えた宍道湖の精妙色彩と動静入り交じった夕陽の芸術を眼にしており、隠岐国賀海岸、和歌山雑賀崎（番所の鼻）、軽井沢で見た夕日の美しさと共に拙著『湖畔の夕映え』のモチーフになっている。水面に映る雲がちぎれては、震えながら戻ろうとする繰り返しの様相を眺め、八雲と自らを命名したハーンの存在と自らの松江における存在の意味とに想いを巡らしたに違いない。

宍道湖

宍道湖

写真は、干拓前の円城寺下の宍道湖畔にあったころの袖師ヶ浦の地蔵で現在のものとはやや様子が違っている。この地蔵については、水難供養のために建てられたものであるが、彼自身の宗教的関心が強く、長男ゴットフリートをなくしたこと関連して夭折した子供の護りとしての地蔵には特別な想いがあったに違いない。自らパステル画を残している。この地は、現在は道路となっているので、嫁ヶ島は当時より近く見える。

昭和二年ごろの袖師ヶ浦の地蔵

嫁ヶ島

東京医科歯科大学　若松秀俊

（一）松江のむかし（湖畔）

昭和三年当時の宍道湖を広範囲に撮影した貴重な写真である。

湖では、現在、「宍道湖七珍」と呼ばれているシジミ、スズキ、アマサギ、シラウオ、モロゲエビ、鯉、ウナギはメヒテルトの思い出である。これらの珍しい漁の姿を何度も眼にしたという。枕蚊帳を逆さにした四ツ手網はことに印象深いと筆者に語っていた。

昭和二年ごろの袖師ヶ浦の地蔵

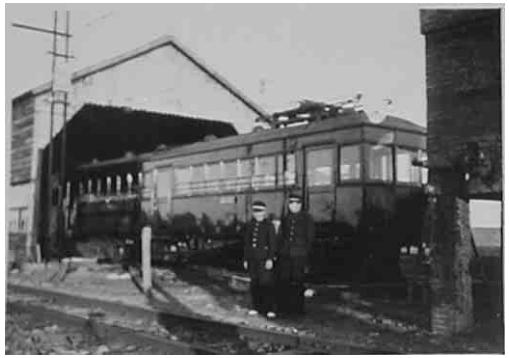
（二）松江のむかし（鉄道）

出雲地方の基幹交通のひとつの一畑鉄道の創業は明治四十五年である。この年に生まれた人でカルシュの薫陶を受けたのが松江の名誉市民の細田吉蔵元衆議院議員である。カルシュ顕彰のために、何度が会って昔話を聞いたことがある。いまも、東京在住の旧同窓会のメンバーが定期的に会合をもっている。この鉄道は宍道湖北岸沿いを走る歴史ある鉄道である。大正十四年七月に社名を一畑電気鉄道会社に改称した。ここに挙げた写真は北松江―平田間を走る電気機関車が開通したころの貴重な写真である。

写真は、おそらく出雲今市―一畑間を電化して運輸業務を開始した昭和二年か、小境灘―北松江間が開通した昭和三年の写真であろう。左は川跡駅であろうか。

一畑電鉄　開通時

左の写真は平田の車庫であるという。



これらとは別に、ＪＲの前身国鉄松江駅の様子を映す写真が幾つか残っている。左は同時期の撮影日が記録されている国鉄の松江駅の写真である。この頃はまだ長女メヒテルトは誕生してはいなかった。

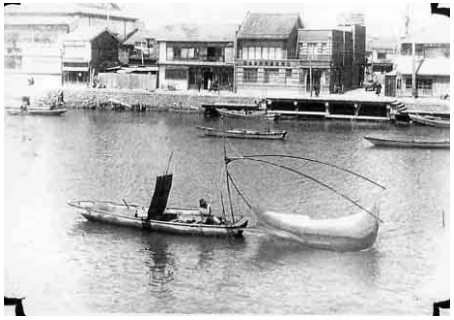
1927年5月2日

東京医科歯科大学　若松秀俊

（二）松江のむかし（河畔）

大橋川を往き来する帆掛け船が往時を語る。これは漁船であろう。これらの地は三島父子と場所を確認した。

次の写真は大橋川での白魚やアマサギの漁の様子であろうか。大橋川の船の様子と沿岸の漁の拠点となった人家が興味深い。右端に見える建物はトラヤビルである。



四ツ手網を使った昔からの漁法である。白魚が網に入るとこれを引き上げた。左写真は夏の大橋川での漁の様子であろう。たくさん舟がでて白魚を獲っている。

大橋川の四ツ手網漁

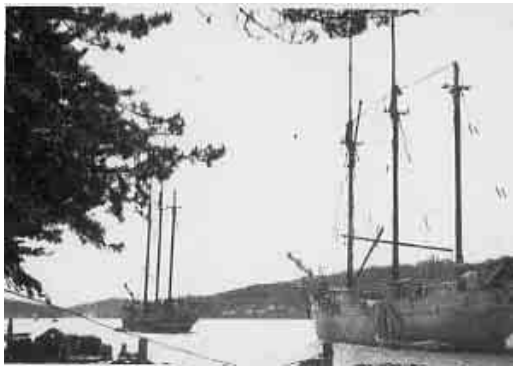
写真の上方には木製の旧松江大橋が見える。

東京医科歯科大学　若松秀俊

（二）松江のむかし（河畔）

宍道湖と中海を結ぶ松江の中心部を流れる大橋川には中州がいくつかあり、そこで農作業にあたる人々の船が大橋川を行き交う。宍道湖の干拓は当時は行われておらず、松江の南北を結ぶ松江大橋は木製であった。シジミ漁師が使う「ざる」であろうか。写真は名産を生む「ざる」である。

大橋川で漁の準備であろうか。



東京医科歯科大学　若松秀俊

（三）松江のむかし（河畔）

多賀神社（朝酌下社）は大橋川沿いの森にある。神在月に参集した神々の妨げにならないように、境内に人の出入りを禁じる参道2ケ所に注連縄を張る。翌朝にこれが終わると、すぐに注連縄を外すことによって、多賀神社の神在祭は終了する。神社での神事は特になく、神々は自然に当社に集まり、自然に去っていく。人々も、神社への出入りを遠慮する。本来的な神々の参集の場所は神社ではなく、神社境内地の魚見塚古墳であるという。左の写真の手前の森にあるのが多賀神社で手間天神社と呼ばれる。間から大山が見える筈であるが、写真撮影当時は天候が優れず、残念ながら見ることができなかったようだ。

多賀神社と手間古墳

右前方に小さく見えるはずの神社が多賀神社である。多賀神社と矢田の渡し付近の様子が以下の写真である。

大橋川矢田の渡し付近　間は大山？

多賀神社正面か

小舟が人と荷を運ぶこの矢田の渡し場は、出雲風土記によれば千六百年前から開けていた。大橋川北岸からみた手間古墳と左手には塩楯島がある。この古墳は東部出雲の地で最大の前方後円墳である。そして、多賀神社裏には、魚見塚古墳がある。ここから見た景色が左写真である。

矢田の渡し付近

魚見塚古墳の付近

矢田の渡し付近

東京医科歯科大学　若松秀俊

（四）松江のむかし（河畔）

手前が中海、向こうが宍道湖である。

Matsue Views

Matsue Views

Matsue Views

Matsue Views

Matsue Views

（一）松江のむかし（田園）

当時は桑畑が多く見られた。松江市内にも見られた（前田俊明氏）という。

（一）松江のむかし（神社）

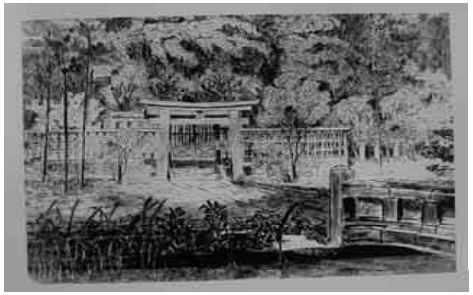
奥谷町にある春日神社の当時の姿である。ここで少女のメヒテルトは午後のひとときを友達と過ごした。『湖畔の夕映え』の「神社のカラス」の一節には子供の純真な心の交流が描かれている。

春日神社

次が当時の佐太神社の様子である。佐陀川の左岸、朝日山の麓にある。出雲大社、日御碕神社とともに出雲三大社と称される。大社造りの社殿が三棟並列になる特徴的な神社である。神在月の神々の宿泊所でもある。フリッツは、何故神々がこの地に集まるのか、いや集まらなければならないのか。有力な神々が何故ここで祀られているのか。そんなことを考えたに違いない。それには、神代の伝説以上の様々な日本の歴史の成り立ちが投影されている。筆者のかってな想像でもあるが、そう言っているカルシュの声が聞こえる。

藩主松平家の菩提寺である月照寺を自ら描いたパステル画が残っている。ヨーロッパと全く趣が異なり、死して自然に帰る日本人の思想が彼にやすらぎを与えたに違いない。

墓地



カルシュ自筆月照寺（藩主松平家の菩提寺）

佐太神社

東京医科歯科大学　若松秀俊

（一）島根のむかし（美保関）

美保関は、島根半島の最東端に位置する岬である。海岸線が断崖となっており、日本海の雄大な眺めを一望できる。天気の良い日には、はるか沖に浮かぶ隠岐の島も望むことができる。岬のすぐ近くの海上に浮かぶ小島の沖の御前島は、美保神社の祭神である俗に恵比寿さまとして漁民の信仰集める事代主命（ことしろぬしのみこと）が魚釣りを楽しんだところといわれている。この岬に美保関灯台が建っている。

古くから隠岐への交通の拠点で、半島東端に位置する美保関の灯台の建つ地蔵崎から西の七類港に至る海岸線が美保の北浦である。地蔵崎の灯台は、一八九八年にフランス人技師によって立てられたものである。カルシュはここの景色と先人の功に感銘した。

美保の関

北浦の景色　1933年

Coast near Matsue

（二）島根のむかし（美保関）

奥谷で暮らした一九三九年以前の松江の周辺の海岸の様子は海のないドレスデン生まれのカルシュにとっては珍しい景色であった。印象に残った海岸の写真をカルシュはたくさん残している。

五期理乙生の酒井は、松江の用事をそこそこに済ませて、大急ぎで引き返し、カルシュの後を追った。本庄（ほんじょう）から手角（たすみ）、中山峠を越えて、日本海沿いの出雲浦部落を通って西へ行く。この辺は集落を通過するごとに、上りと下りの坂道があり、とりわけ難所である。ぶつぶつ言いながら、北浦千酌（きたうらちくみ）、笠浦（かさうら）にでる。日本海の荒波に浸食されて、できあがった海岸線は、いたるところ岬と湾である。それらは絶壁や岩礁で形造られている。やがて、漁港で賑わう野井（のい）、瀬崎（せざき）と難路を急ぎ、走り抜けて野波（のなみ）の部落へ入った。

『湖畔の夕映え』の一節である。

1

Coast near Matsue

Coast near Matsue

Coast near Matsue

（一）島根のむかし（弓が浜）

大砂州である弓浜半島の北端に位置し、伯耆富士大山を背景にした、西は中海に面する漁港が境港市である。白砂青松の海岸線を有する風光明媚な土地で、本来、出雲と一体化していた土地が県の配置の変更によって島根から行政上分離した。

境港

境港

（二）島根のむかし（加賀浦）

つぎは、ハーンの書にも描かれている難所といわれる加賀の潜戸の近辺と加賀浦の民家である。ボートに乗ってこの辺りを回遊したカルシュは、この地の伝説も知っていて、興味を抱いて訪れたに違いない。

旧潜戸入り口

親より先になくなった子供の霊が小石を積み上げる賽の河原の伝説を興味深く聞いたのであろう。子をなくしたカルシュにとっては、後々まで印象に残った日本人の死者に対する心根である。

潜戸の「賽の河原」

加賀浦の民家の屋根の様子に感銘したのであろうか。何枚か屋根の写真を残している。

ハーンが一時期住んで（逗留）いた加賀浦の民家

あまり知られていないが、ハーンが住んだ家が記録とともに残っている。これを記したのはカルシュその人であり、極めて信憑性が高い。ＤＡＡＤ東京事務所でのＡ・Ｇ博士による解読と七月一日メヒテルトとの会話と資料からも確認した。

加賀浦の民家

加賀浦の民家

東京医科歯科大学　若松秀俊

（一）島根のむかし（大根島）

中海に噴出した火山島で、島には二箇所の溶岩トンネルがある。最も著名なものは島の東端の遅江にある国特別天然の溶岩随道(ある。俗に風穴といわれ、全長九十三㍍で海底に達する。天井はうろこ状をなし、溶岩鍾乳もみられる。

大根島 洞穴 生徒と一緒に

カルシュ一家が暮らした松江と周辺は、今とはずいぶん異なっていた。玄武岩からなる大根島は現在は松江市と陸続きであるが、当時は中海に浮かぶ島であった。写真は、そりこ舟を浮かべた大根島の岸辺のようすである。かつては松江から中海を経て美保関に美しい景色を眺めながら汽船で行き来していた。

一九六八（昭和四十三）年に着工された中海干拓事業で松江市の大海崎と島を結ぶ堤防道路と中海水門の道路が開通し、現在は干拓堤防によって自動車で簡単に行けるが、当時は船でしかそこに渡ることができなかった。

連絡汽船

左の写真は枕木山から見た、離れて浮かぶ江島と大根島である。カルシュはこの光景をパステル画として残している。

枕木山から展望した江島（左）と大根島（右）

東京医科歯科大学　若松秀俊

（二）島根のむかし（大根島）

大根島とそりこ舟

大根島　そりこ舟

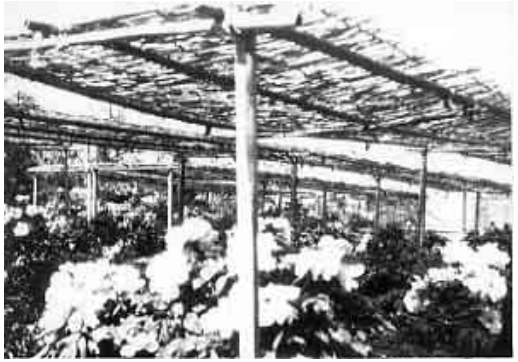
そりこ舟はへさきの板が極端に反っていたことからその名がある。左右に揺れながらはしり、人力により底引漁が可能であった。樅の巨木を素材にした丸木舟で、素材がなくなった現在では、「そりこ舟」は極めて少なくなり、今は記念保存品となっている。（前田氏による）

大根島そりこ舟

大根島への遠足　生徒とともに

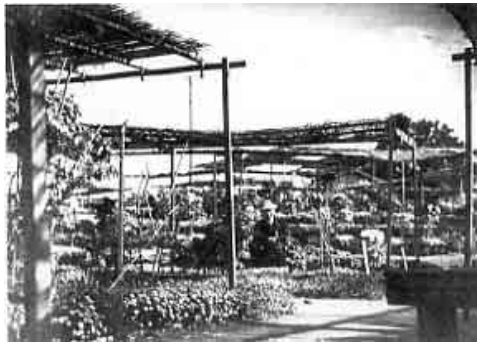
（三）島根のむかし（大根島）

大根島の有名な牡丹園はフリッツが好きな所でもあった。湖の中にある島はヘルマン・ヘッセと藤野義夫ドイツ語教授との親交があったボーデン湖の中に浮かぶ、花の咲き乱れるマイナウ島を思い出させる。三十年前の筆者の思い出である。



大根島牡丹園

大根島牡丹園



大根島牡丹園

この地は朝鮮半島から近いこともあって、上代から朝鮮人参を栽培していたというが、藩政時代からであるともいわれている。ほとんどが畑地である。島は奈良時代には全島人家はなく、牧場で軍団の馬を育成していたと思われる。

左写真は大根島の人参畑（前田氏）であろう。

東京医科歯科大学　若松秀俊

（一）島根のむかし（隠岐）

後鳥羽上皇縁の島である。自然の美しさがカルシュの心を一層清らかで、純粋で優しい気持ちに誘った。隠岐神社は地祭神が後鳥羽上皇で、昭和十四年七百年祭を期して御火葬塚の隣に造営された。

牛突きと呼ばれる闘牛が後鳥羽上皇のころから隠岐島で行われている。

隠岐島の牛突き

この地は、地質学的には第三紀に噴出による火山島で玄武岩からなる。カルシュが、ただただ、自然の造形の力に驚くだけであった。この地の国賀の夕陽は湖畔の夕映えのモチーフとなっている。

東京医科歯科大学　若松秀俊

（一）島根のむかし（朝日山）

宍道湖と中海を抱えるように荒海の日本海に面して東西に広がる島根半島は、カルシュが日本の美しさに感動したところである。

現在の鹿島町の南端にあり、松江市に隣接する位置にあるのが朝日山である。出雲風土記に記されている神名火山がこれに当たる。山頂まで険しい小径が続くが山頂からの眺めは絶景である。カルシュは、来日後間もなく昭和二年にこの辺りの風景をカメラに収めている。眼下に宍道湖、東は中海、大山、西に出雲平野が展望される。それに北東に隠岐島が望めるという。

朝日山の麓、佐陀川の左岸に佐太神社が鎮座する。延喜式にも記されており、出雲大社、日御崎神社とともに出雲三大社と称されていた。

自然の美しさと神々の住む荘厳さが心を清らかにしてくれる。カルシュの学問を通した、人生観を確信するこころ休まる場所であった。左は朝日山から望んだ出雲の海岸である。この海岸は出入りが多く西は日御碕、東は地蔵崎まで続き、この美しさの拡がりをカルシュも娘のメヒテルトも心に留めている。

朝日山より出雲海岸を展望する

次の二枚の写真は朝日山から望んだ光景である。

朝日山からの眺望

朝日山からの眺望

東京医科歯科大学　若松秀俊

（一）松江のむかし（街並）

カルシュ一家が暮らした一九三九年以前の松江および周辺を撮した写真が種々残っている。実際には、アメリカのメヒテルト宅やドイツのフリーデルン宅にあるアルバムに一、五〇〇枚を越える珍しい写真が整理されている。背景は今とはずいぶん異なるようだが、松江在住の三島と埼玉在住の竹内が写真の撮影場所を特定してくれた。

日本に赴任してまもなく、昭和天皇の即位が行われた。昭和二年であろう。左の写真は御大典記念の宮行列で蓼行列と一緒に行った時の様子である。殿町の山陰合同銀行北支店前（または白潟本町の元山陰合同銀行本店前）で撮影したものであろう。蓼行列は伝統的には、十一月三日の天長節（明治節）に大鼓を叩きながら山車を運ぶ行列であった。

昭和天皇の即位御大典記念の宮行列

昭和天皇の即位御大典記念の宮行列

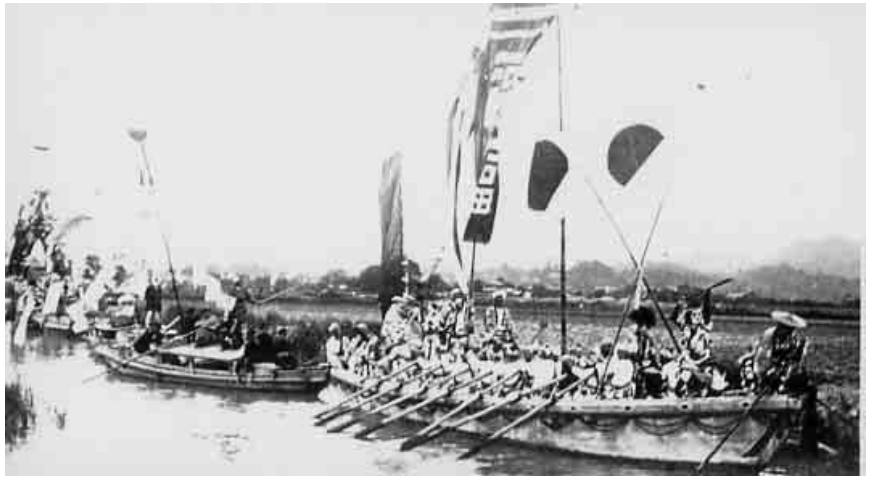
右は祭りの途中、塩見縄手の新聞社前の様子であろうか。

御大典行列

東京医科歯科大学　若松秀俊

（一）松江のむかし（祭り）

カルシュには、何といっても祭りがとても珍しかった。夢中で写真を撮った。十二年に一度、卯年に五穀豊穣を願ったホーランエンヤ祭が行われる。このときは昭和二年であった。この祭りは城山稲荷神社のご神体が阿太加夜神社に三日かけて移る神幸祭である。



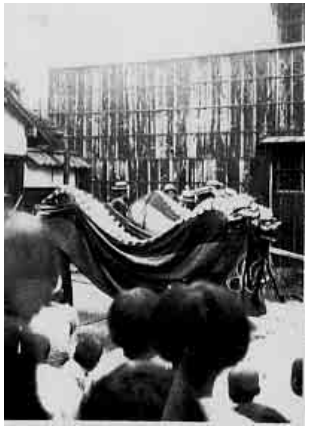
ホーランエンヤ神幸祭

ホーランエンヤという名で地元で親しまれている。古くから宮島の管絃祭、大阪天満の天神祭とならんで、日本三大船神事の一つで、松江市が誇る大きな祭りである。

藩祖松平直政公が入国して十年目（一六四八年）は天候不順で不作が予想されたので、城山稲荷神社の御神霊を阿太加夜神社に運び、豊作を祈願したのが起源で、最初は十年ごとに行われた。その後、一八〇八年の御神幸の折、暴風雨で座礁しかけた神輿船が馬潟の漁師に助けられ、阿太加夜神社に無事送り届けられたのに倣い、櫂伝馬船が加わるようになった。豊作と民衆の幸福を祈願するこの船神事は、以来卯年十二年ごとに船渡御による神幸祭として行われたという。前回は、平成九年五月二十三日～二十五日に、地域伝統芸能祭の中心イベントとして渡御祭、中日祭、還御祭が催された。五地区から繰り出す鼻曳船を先頭に、清目船、櫂伝馬船と呼ばれるおどり船、神楽船、神輿船、神能船、両神社氏子船など約百隻が連なり、延々一キロに及ぶ船行列が進む。金色の宝珠を中心に色鮮やかな旗、幟をなびかせた、豪華絢爛たる時代絵巻になる。宍道湖、大橋川、中海を彩り、古来伝承の歌舞伎の衣装の踊り子や、囃子の子供、そして櫂漕ぎの若い衆などが「ホーオオエンヤ、ホーランエーエ、ヨヤサノサ、エーララノランラ」と唄い踊る。その舞台となるのが櫂伝馬船である。船は、本来松江城内堀の乙部灘から漕ぎ出していたが、堀川の水深が浅くなり、昭和三十三年を最後に宍道湖岸からの船出に変わった。

主役となる五隻の櫂伝馬船は長さ約十五メートル、幅約三メートル、乗船人数約五十名、装飾された豪華船で、もとは網船を改造して使用していたが、現在は調達が困難で新造している。

（二）松江のむかし（祭り）



東京医科歯科大学　若松秀俊

（三）松江のむかし（祭り）

一七三四年五代藩主宣維（のぶすみ）が奥方を迎えた際に、領民たちが大きな『鼓（どう）太鼓』を作って祝いのために打ち鳴らしたのが始まりといわれている。

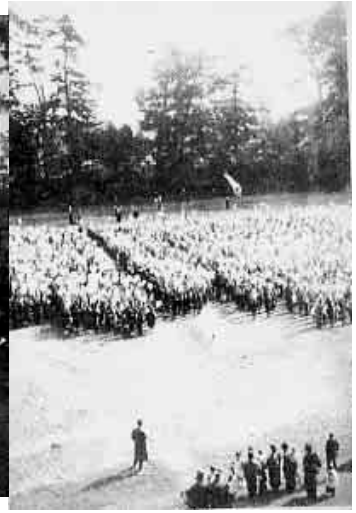
どうの直径は二メートル。これを山車（だし）に二つ載せ、叩きながらその他十数台の山車が街中を練り歩く。現在毎年十一月三日の文化の日に太鼓を叩きながら行われる。

東京医科歯科大学　若松秀俊

東京医科歯科大学　若松秀俊

東京医科歯科大学　若松秀俊

東京医科歯科大学　若松秀俊



東京医科歯科大学　若松秀俊

（一）松江の思い出

フリッツは松江に来た動機とこの地の印象を日本を去るにあたって回想的に次のように語っている。

《松江で過ごした歳月と同僚の先生方や生徒達とのふれあいは、何にも替えがたい、素晴らしいものであった。また想像していたとおりたぐいまれな風景に接することができた》

一九一九年頃、すでにラフカディオ・ハーンの本でこの町や美しい島根半島、大社、美保関のことなどを詳しく読んでおり、とても興味が引かれた。しかし、日本行きはとても実現しそうにもなかった。そのころ、東京から、ドイツ語講師の募集があることを聞いていた。でも、関東大震災のため、その話は立ち消えになった。

「で、どうして松江に？」という生徒の問いかけに、カルシュは親友の長屋から誘いがあったことと、日本への憧憬が強くなったこと、また、ドイツは国内に定職がなかったことを挙げている。

しかし、松江でこんなに永く過ごそうとは思っていなかったし、二、三年で帰ろうと思っていたという。しかし十四年もいて、人々や景色に接するうちに気持ちがこの国から離れられなくなって、松江が第二の故郷になったとのことである。

「ドイツは繁栄を手にした、世界の強国であり、学問も芸術も世界をリードするすばらしい国であります。ですから、ドイツ語、ドイツ文学、ドイツ哲学を師と仰ぎ、私達は勉強してるのです」との生徒の気負いの言葉があった。

とにかくカルシュは、日本の人々と自然に積極的に入り込んで、その真髄を探ろうとしていた。また、生徒との対話では、自分の学問的立場をふまえて西洋と東洋の文化の洞察的比較を出雲地方のそれを通して行っている。ところで、日本での体験は学校だけでなく、松江の街や近辺にも及び、それらの変貌を語っている。新しくできたきれいな橋を渡ったり、美しい街路を見たりすると、十四年前の松江の面影はもう認められないと感慨を述べている。

「ヨーロッパから見たら、日本はずいぶん遅れているのでしょうね」との生徒からの問かけに、松江に限らず、各地で往古の記念を

失わず、今に昔を伝えていることをカルシュは語った。そして、今も風致を特徴づける昔ながらの名所やお城、それに昔のままの姿を指摘され感じ入った。生徒たちは慣れて気がつかないことであった。そんな素晴らしいところに住めたことに、カルシュはいつもうれしく思っていた。

カルシュによれば、新しい物を喜び受け入れながらも、伝統的な物に対していつも敬虔であり、祖先から伝わった歴史的な遺産をも重んずるというのは、国民の品格が深遠である証拠だと生徒に断言している。この出雲地方には仮象の世界、それに近づく一体化の精神の高まりと静かな調和の世界がある。ヨーロッパで欠けているのは、この点であるとのことであった。これはハルトマンだけでなく、シュタイナーも同様の考えであると言っていた。

さらに秋に田圃道を歩いて農夫達が精出して働くさまを例に挙げ、日本の人々の勤勉さにも触れている。自分がこのように日本とその国民をよく知ることができたのは、ひとえに友達のお蔭だとカルシュは結んでいた。

（二）松江の思い出

カルシュは、また、ドイツにそしてヨーロッパにはない日本の自然について感じた率直な印象と熱い思いを生徒に伝えようとした。

彼は日本の自然の美しさに言及している。生徒はその話に半信半疑であった。

みんなと行動をともにした遠足の途上、あるいはひとりで散策したり自転車に乗った時、自分が繰返してその確信を深めたことをカルシュがいう。

「日本は何と風景美の豊かな国だろう。山と海とのかくもみごとに融合している自然を他に見たことがない」このことは、カルシュにとって、とくに意外な体験だったようだ。

「それは松島、天ノ橋立、宮島のような日本の名所奇勝のことをいっているのではなく、私の眼前に彷彿するのは、例えばこの大山と三瓶山との間の景色のあまりにも《知られなさ過ぎる》美しさなのです」

「ドイツには、美しいところがないのですか？」という質問が日本の景色を見なれている生徒の口からでた。

「いやとんでもない。それは、それは、とても美しい国です。でも、日本の美しさとは違うのです」とカルシュはいう。

生徒は授業中にもカルシュが何度か話をしてくれたことを思い出した。

カルシュは、この美しさは実際もっと有名になるだけの値打ちがある世界に誇るべき美しさである、と協調する。

というのは、幾度となく枕木山の頂上に立って夕日に映える陸と海とを瞰望し、あの印象深い平和な風景に見入ったことを思い出すからであった。

出雲国風土記で神名火山と呼ばれてた朝日山の山頂では、眼下には宍道湖、東には中海から大山の、北東には隠岐島への眺望が広がる。何にも替えがたいその場の美しさを思い浮かべながら、あふれる感慨をフリッツが生徒達に語ったという。

「この出雲の国の老木鬱蒼たる神社仏閣の美しさ……海―入江―島嶼……さては遙かに淡くかがやく隠岐の国の山々を配して青く透き通った日本海の美しさ。それはもう、何にも例えようもない美しいものなのです」

といいながら、涙と共に感動に酔う姿があった。

「ドイツの友達に一度でよいからこの絶景を見せてやりたい。そう思ったことが何度となくありました」が彼の日本の自然の美しさに対する認識であった。

枕木山から望んだ大山　フリッツ自筆のパステル画

（一）松江とのきずな

昭和十四（一九三九）年、契約任期が満ちて帰国することになった。日本で買い集めた珍しいものの荷造りや帰国の準備が終わって、生徒からの送別会もあった。日本を去るに当たって、正確を期するために、ドイツ語で来し方行く末、日本や松江の風景や人柄の印象を自宅の書斎でしたためた。これで、日本ともお別れだ。子どもの教育も考えねばならない。松江を去るのは何とも寂しい気がする。子供達も近所の仲良しとお別れの小さなパーティを開いて、名残を惜しんだ。

同僚からの歓送会が催された。苦楽を共にした同僚と語り合った。

このとき、何度も登った思い出深い千鳥城を象った掛け物が同僚から別れの記念に贈られた。その裏面に最も親しく交わった教職員の自筆の署名がなされている。高畠喜市（独語）、小林松次郎（独語）、加藤恂二郎（法学・経済・独語）、山下佐平（心理・論理・独語）、原田和三郎（独語）、藤野義夫（独語）、高橋敬視（哲学・独語）、松原武夫（物理）ら同僚の名前がはっきりと読みとれる。

ドイツ帰国に際して、同僚よりの寄せ書き

この時期には、加藤と山下はすでに退職しており、この日のためおそらくわざわざ出向いてきたのであろう。

なお、後々までつきあいのあった松原はこの年の六月に退職している。カルシュが来日したときには、ＮＨＫのインタビューにも応じたし、メヒテルトが昭和六十四年再来日の折りにも、高齢であったが面会している。松原の肉声がカルシュ父娘の声と共に筆者の手許に保存されている。

ところで、竹内紀代子がカルシュ一家の帰国の際に、見送りに松江駅に行った。彼女はに買って貰ったお気に入りの和服を着てでかけた。すると、ドイツ語講師に赴任したばかりの大学卒業間もないハンス・シュヴァルベ夫妻が、その和服がとても似合うのを見て、何とか譲ってくれるようにせがまれたことを語ってくれた。紀代子はとても困惑したが、結局は譲ることはしなかったとのことである。

写真に見られる松江駅での見送りには、右から藤野教授・小林トシ子・藤野の娘・高畠キヨ子・高畠夫人・?・?・大笹（中村）トキエ・?短期間雇われていたが結核のため辞めた女性・英語講師の高橋夫人・それに、北堀街の掛け物屋の主人の井上氏である。カルシュ夫妻はお得意さんで、彼の店から沢山の品を購入した

松江駅での見送り(1939年春)

中央の幼児がフリーデルンで母エンメラの腕に抱かれている。この時二歳であった。この写真に写っている人については一部不明であるが、いずれ明らかにできればと思っている。

（二）松江とのきずな

戦後の復興も一段落した昭和三十二（一九五七）年五月に、かつての教え子の梶川が日本から訪ねてくることになった。明日がその日である。

本棚からアルバムを取り出し、ページをめくった。現在も、ドイツではフィルムや撮影装置の代表的な会社であるアグファ社のカメラで撮った昔の松江の風景だ。生徒の顔が見える。戦争で亡くなった生徒のことを風の便りで聞いた。

このころは日本円の外貨への交換が法的に自由にならないので、窮屈な旅行であったとのことだ。

このあたりは、フリーデルンの思い出を参考にしている。いまも大事に保存されているゲストブック（訪問記録）の文面からおそらく、次のような会話があったと想像される。旧知と再会したときには、フリッツは常に「そう、神のお恵みです。感謝しましょう」といったそうである。彼は他の宗教に深い理解はあったが、個人的にはプロテスタントであった。

このときに会った梶川がカルシュにマールブルクを案内されて素晴らしい石畳や美しい古城の緑に感嘆した。さらに山上の城からの眺めに心を打たれ、先生とともに三十年前の昔を偲んだという。

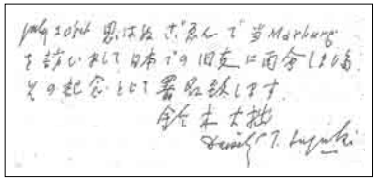
日本は素晴らしいところだった。それにも増して、想い出深い松江の生活だった。今更のごとく松江を懐かしく思い出した。二人で思い出を語り合った。一晩、ここで過ごした彼が翌朝名残を惜しみながら、暇を請うた。

翌年十月にはかつての陸上名選手で、今は小倉市立病院副院長の田村忠雄が訪ずれた。涙ながらに再会を喜び合った。カルシュ夫妻に会って感涙にむせび目頭を押さえた。

想えば、高等学校の近くにある、茅葺きの山荘茶室の菅田庵（かんでんあん）を訪ねたものだ。先生と一緒に前庭のつつじを眺め、大橋川を遠く見た。そして、あの見事な借景の奥深い風雅を賞でたものだった。

このとき、級友三人からあずかった心からのお土産を届けた。

フリッツがお礼を言いながら、ゲストブックをエンメラから受け取って、他の訪問者の署名も指し示したという。



三笠宮崇仁殿下によるパーティへの招待状(上)
鈴木大拙によるドイツのカルシュ家の訪問記録(下)

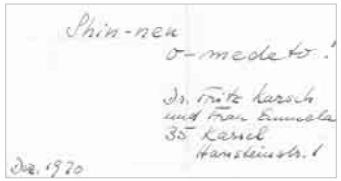
昭和二十二年ヘッセン州で生活基盤をやっと整えたカルシュ博士はマールブルクでハイラー教授との旧交を回復した。

筆者が宮内庁で調べた結果から、彼はボンの日本大使館と接触したり、ハイラー博士を通じて三笠宮殿下と親交があった様子が伺える。例えば、一九六〇年九月十三日にマールブルクの同殿下のパーティに招待された事実が確認されている。日本週間（Japan Woche）への招待状はハイラー博士を通じて彼の手許に届いている。フリーデルンによればハイラー博士は彼の学生時代からの友人で、マールブルク大学神学教授であった。

その他に、宗教哲学者の鈴木大拙や微生物病学者の奥野良臣らの訪問記録が残っている。

（一）終生の因縁

昭和三十六（一九六一）年には、フリッツは病気のため年金生活に入った。彼はそれから四年後に、古巣のキリスト教共同体に属するカッセルの養老院のアルベルト。コルベ・ハイムに移住し、ライフワークである人智学からみた東洋哲学史の研究に専念しようとした。この頃、折にふれて日本に関する講演をしている。昭和四十四（一九六九）年四月、日本訪問後の印象をカッセルの盲人学校で講演している。ドイツ語での約一時間半にわたる講演の記録がメヒテルトの地下倉庫から発見された。カルシュの肉声の記録がテープに残っていた。現在、筆者の手許に保存されている。



カッセルから江上正孝に宛てた年賀状

1967年創立のカッセルの老人ホーム
（アルベルト・コルベ・ハイム）

十七期理乙で九州帝大医学部卒業後、先駆けて福祉施設の整備などに尽力してきた、江上正孝宛のカルシュ自筆の一九七〇年の年賀状が残っている。これがその葉書で表はカッセル老人ホームの写真である。

直接の生徒ではなかったが、何かと太いきずなを保っていた田総の残した言葉を紹介する。カルシュ夫妻は、夏休の間ずっと大山に家を借りて過ごすのが常であった。田総はギルソンと大山登山をした時、カルシュの在所に立ち寄ったという。このことは既に述べた。聞くところによれば、山下夫妻とも、何度か一緒に過ごしたという。

山下は九期文乙のクラス担任であったことは『湖畔の夕映え』にも述べているとおりである。さて、カルシュが帰国後、二十余年後、カルシュの教え子で医師になった卒業生のグループの発案で、カルシュを日本に約一ケ月間招待した。その折、アメリカ在住の長女のセイント・ゴア夫人（メヒテルト）も来日して、滞留中ずっと一緒に行動し、父の講演の通訳などをした。田総が淞高に在学中は、彼女は二才か三才の可愛い子であった。久しぶりに先生に会いたと思って、先生の滞在先のホテル一畑に泊ってゆっくり話をすることができた。出雲大社に参拝された時も一緒であったし、彼女とも親しく話ができたという。

カルシュが亡くなった後、昭和四十七年田総の女婿が家族連れでドイツに留学した時、田総に代って老人ホームにカルシュ夫人を慰問してくれた。夫人は大変喜んで涙を流したということである。日本が懐かしくて、部屋一杯に日本の色々な品が飾られていたと後で聞いたという。その夫人もとうに亡くなり、メヒテルトにも既に五人の孫がいる。月日の流れをしみじみと感じていた。彼女からは、毎年必ずクリスマス・カードが届き、時々写真も届いたという。これらは部分的に『湖畔の夕映え』のエピローグに書いてある通りである。

カルシュのドイツ語での講演音声記録

（二）終生の因縁

カルシュと大山の関係は因縁めいた特別なものがある。彼は子供の頃に、大山に似た景色を何度も夢見たという。大山の神秘性は彼の思想とは決して無縁ではなかった。小説『湖畔の夕映え』でも、大山はカルシュの日本との関係の伏線であったし、日本での生活と自分の学問の源泉とも言うべきものであった。これから受けた自然からの影響と大きな人間観が生徒や娘のメヒテルトとフリーデルンに受け継がれたのはほぼ間違いない。

1930年頃の大山と麓の様子

カルシュにとって、こうした景色だけでなく、見たこともなかった佐多神社や出雲大社、神魂神社などは特別の印象があったという。自然のなかで古来の諸々の信仰の伝統のみならず、整理統合されてきた神々の全体の調和にやすらぎと美のエネルギーを見ながら、心の平安をこの地に見いだしたのがカルシュであろう。カルシュの先人である遠い昔に来日した外国人もおそらく、同じようなやすらぎをこの地に見いだしたのであろう。

神社に出て、鳥居をじっと眺めていたのをよく眼にしたという。構えの内側が聖なる域であり、鳥居に佇む鳥が自由に羽ばたき、神々と人々を結ぶ。そんな上古の信仰を想ったのであろう。

それに何よりもカルシュにとっては、近くの神社とその雰囲気が彼の自然観や人間観、歴史観に、それに思索に直接的な影響を及ぼしたようである。このことはカルシュがやがてこよなく日本を愛したことにつながるものである。

そんな中で、彼は大山はもちろんのこと、多くの自然の様子や空想の景色をパステル画に描いていることはすでに何度も述べた。

しかし、その中でも彼が大山を特別に考えていたことは、家族の証言から明らかである。実際、子供の頃何度も夢に見たことを話の中で、繰り返し語っていたという。それから、『湖畔の夕映え』で述べた黄金の飾りのカフスボタンの変わらぬ輝きを病床にあってよく見つめては感慨に耽っていたという。フリッツを日本とを結びつけたドレスデンの博覧会で日本人から入手したものである。いまも、フリーデルンの手許に残る父フリッツの形見の品である。

《自分の行く路を照らしてくれた》その光の導きで、心のうちが《天の恵みに満ちた》光り輝く美しい人生であったという。このことは、次の言葉とともに晩年に繰り返して語られたという。

《この地を自分の故郷とずっと考えていた。》

《たましいが日本人であると思っていた。》

これらは、永久の時の流れと静けさのなかで、カルシュに与えられた運命の輪によって結ばれて生じた数々の現象の根幹をなすものであったろう。日本との関係はシックザール（宿命）であり、その生じたすべての事象は天命によるものであった。それゆえ、昭和四十三年来日の折、出雲大社に参拝した時に、自分の人生のすべてが整理されたことをフリッツは悟った。

自らの人生の終末にあって、彼はその想いを周囲の者に、静かに語ったという。